短期大学における英語教育

中島　直樹

1．はじめに

平成17年４月，城西短期大学において英語力調査が実施され，外国人留学生を除く80名の短期大学新入生が受験した（経営情報実務学科57名：現代文化学科23名）。近年，短大を取り巻く環境が大きく変化し，それに伴い様々なタイプの学生が入学するようになった。学生の英語力にも多様化の現象が見られ，ある程度基礎力のある学生とあまり基礎力のない学生との差が以前より大きくなったように感じられる。そのため，実際の授業に入る前に学生一人一人の英語力がどの程度であるかを教員サイドがあらかじめ認識しておくことがより必要になった。また，その調査結果を基に，一年次の英語の必修科目であるTOEICイングリシュＩＡ・ＩＢ（TOEICのリスニングセクションに重点を置いた演習）とTOEICイングリシュＩＣ・ＩＤ（TOEICのリーディングセクションに重点を置いた演習）を能力別のクラス編成にして，これまで以上に授業の効率化と学生のレベルアップを図ろうというねらいで，数年前から新入生全員に対して実施されてきた。しかし，今年度は語学教育センターが業者（桐原書店）のプレースメント・テストを導入したため，これまでの英語力調査を短期大学独自で第１回目の英語の授業時に実施した。

本論は，本年度学生の英語力調査の結果を，昨年度あるいはそれ以前の学生のそれと比較することにより，本年度に入学した学生の英語力がこれまでの学生とどう違うのかということを検討すると共に，一年後の最終授業時に前回と全く同じ条件で同じ試験を実施して，どれだけスコアが伸びたかを調査し，本学学生の英語力の特徴を明らかにしようとする試みである。それに加えて，12月に本学で実施されたTOEICテストのスコアも比較・検討し，今年度新入生の英語力の新しい傾向を分析していきたい。

2. 過去３年間の英語力調査の結果について

今回採用した試験問題は平成14年度より使用しているものである。13年度までの問題はやや難しいものであったため，平成14年度に，少しやさしい試験問題を新たに作成し，採用した。年々，学生の英語基礎力が低下し，平均点が30点台に低迷するようになり，試験としては難しすぎると判断したためであった。平成14年度以前の学生との比較は単純にはできないが，これにより学生の英語力の差がはっきりと表れるはずである。

まずはじめに，平成14年度の英語力調査を振り返ってみたい。出題形式は全問マークシート方式，試験時間は一時間，全50問で100点満点の試験であった。受験できなかった学生もいたが，新入生のほとんどにあたる93名が受験し，全体の平均点は約56.9点であった。学科別の受験者数と平均点は表１の通りである。

表１　平成14年度英語力調査結果

学　　科	受験者数	平 均 点
経営情報実務	67名	約57.8点
現 代 文 化	26名	約54.7点
全　　体	93名	約56.9点

平成12年度には文学科に英米文学専攻があったためか，経営学科よりも文学科の平均点の方が高かった。この傾向は平成13年度にも続き，経営情報実務学科約35.3点，現代文化学科約36.0点（旧問題）と僅かに現代文化学科の平均点の方が高かった。しかし，平成14年度は経営情報実務学科の平均点の方が高い結果となった。このことは実際に授業を担当していても感じられたことであったが，それが数字の上にも表れた結果になった。実際の得点分布を見てみると，かなり大きな広がりを持っていたことが分かる。90点以上のかなり基礎力のある学生が６名，次いで75点から89点までのある程度基礎力のある学生が10名，29点以下のほとんど基礎力のない学生が７名おり，その中間に30点から74点までの中間層があった。しかし，よく見るとその中間層の中にもいくつかの山が見られた。60点から74点までの上位の層（26名）と45点から59点までの中位の層（24名）と30点から44点までの下位の層（20名）とにおおよそ分類でき，この３つの層が14年度の女子短期大学部新入生に占める割り合いは実に75パーセントを超えていた。

次に，平成15年度の結果について見てみたい。59名の新入生全員が受験し，全体の平均点は約54.5点であった。学科別の受験者数と平均点は表２の通りである。

表２　平成15年度英語力調査結果

学　　科	受験者数	平 均 点
経営情報実務	47名	約55.0点
現 代 文 化	12名	約52.6点
全　　体	59名	約54.5点

平成14年度の英語力調査の平均点と比較すると，経営情報実務学科においては2.8点，現代文化学科においては2.1点，全体では2.4点下がっていた。また，この年度も経営情報実務学科の平均点の方が現代文化学科のそれより高い結果となった。

平成15年度入学生の英語力の特徴は，得点分布の中に表れていた。受験者数の減少のため，得点分布グラフの形にある程度の変化は見られたが，基本的には前年度とそれほど変わってはいなかった。しかし，前年度と違う点は，90点以上のかなり基礎力のある学生がひとりもいなくなった（前年度は６名）ことと，中間層とされてきた領域の形が逆転したことであった。30点から74点までの層を中間層とした場合，そこにはいくつかの山があることが前年度の検証で分かっていた。そして，前年度は60点から74点までの上位の層に26名，45点から59点までの中位の層に24名，30点から44点までの下位の層に20名の学生がいて，得点層が上位になればなるほどそれだけ学生数も多かったが，平成15年度は上位の層に16名，中位の層に17名，下位の層に17名と，中間よりやや下に比重が移ってきた。

最後に，平成16年度の結果について検討したい。43名の新入生が受験し，全体の平均点は約50.5点であった。学科別の受験者数と平均点は以下の表３の通りである。

表３　平成16年度英語力調査結果

学　　科	受験者数	平 均 点
経営情報実務	33名	約50.5点
現 代 文 化	10名	約50.4点
全　　体	43名	約50.5点

前年度の平均点と比較すると，経営情報実務学科においては4.5点，現代文化学科においては2.2点，全体では4.0点下がっている。平成14年度からの全体の平均点の推移を見てみると，14年度：56.9点，15年度：54.5点，16年度：50.5点と年々下降の一途をたどっていた。短大に入学してくる学生の英語基礎力が年々低下していたことを如実に示していよう。この傾向はデータを採りはじめた平成12年度からずっと続いていた。また，この年度も経営情報実務学科の平均点の方が現代文化学科のそれより高かった。

全体の得点の分布を調べてみると，基本的には前年度とそれほど変わってはいなかったことが分かる。前年度の分布をほぼ継承していたと言ってよいであろう。90点以上のかなり基礎力のある学生がひとりもいなくなったことも，中間層とされてきた領域の形が逆転したことも前年と同様であった。それに加えて，75点から89点までのある程度基礎力のある学生が５名となり，前年より３名減少してしまった。Ａクラス（トップクラス）といえども，今まで以上に絶えず基礎を確認しながら授業を進めなければいけない状況になった。中間層の中を詳しく見てみると，60点から74点までの上位の層に９名，45点から59点までの中位の層に13名，30点から44点までの下位の層に13名の学生がいた。平成14年度までは，得点層が上位になればなるほどそれだけ学生数も多かったが，平成15年度から中下位に比重が移ってきており，その傾向は平成16年度も続いていた。良いとは言えない本学入学生の英語力の傾向であったが，そのことが年々，平均点を下げる最大の理由となっていた。

3．今年度の結果について

今年度も昨年度と同様に，出題形式は全問マークシート方式，試験時間は１時間，全50問で100点満点の試験とした。平成14年度からの同一問題を使用しているので過年度との比較が可能である。外国人留学生を除く80名が受験した。全体の平均点は約56.5点であった。学科別の受験者数と平均点は以下の表４の通りである。

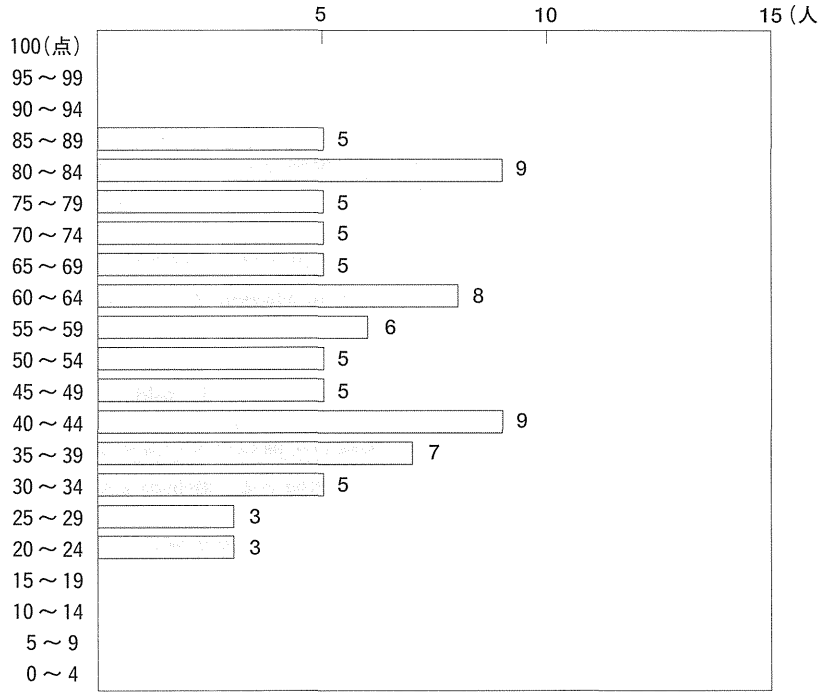
表４　平成17年度英語力調査結果（４月実施）

学　　科	受験者数	平 均 点
経営情報実務	57名	約56.9点
現 代 文 化	23名	約55.5点
全　　体	80名	約56.5点

昨年度の平均点と比較すると，経営情報実務学科においては6.4点，現代文化学科においては5.1点，短大全体では6.0点上昇した。平成12年度から短大入学生の英語力調査のデータを採っているが，前年度の平均点を上回ったのは初めてのことである。特に，昨年度入学生の学力低下は甚だしかったが，ここに来てようやく上向きに転じたことは喜ばしいことであると思う。ただ，数値的に見れば，平成14年度のレベルに戻ったに過ぎないとも言えるのかもしれない。

次に，全体の得点の分布を見てみることにする。100点を５点刻みに分け，それぞれの得点層に何人の学生が分布しているのかを表したのが次のグラフである。

平成17年度英語力調査結果得点分布グラフ（４月実施）



昨年度と比べて，短大全体では6.0点も平均点が上昇しているので，今回はまったく異なったグラフの形になっている。90点以上のかなり基礎力のある学生がひとりもいないことは残念ではあるが，75点から89点までのある程度基礎力のある学生が19名おり，この層が本学を引っ張る牽引車的存在になっている。受験者数が80名なので，約４人に１人がここに属していることになり，今年度の躍進を支えた原動力のひとつになっている。29点以下のほとんど基礎力のない学生が６名いるが，この割り合いは昨年度とほぼ同じである。30点から74点までの中間層は55名であった。この中間層の中を詳しく見てみると，60点から74点までの上位の層に18名，45点から59点までの中位の層に16名，30点から44点までの下位の層に21名の学生がいる。昨年度は，得点層が下位になればなるほどそれだけ学生数も多かったが，今回はどの層にもほぼ均等に数が分布している。平成15年度から中下位に比重が移ってきていて，そのことが平均点を下げる最大の理由となっていたが，今回，その流れが大きく変わった意義は大きい。

4．問題の検証

次に，実際に出題された問題を検討し，正解率の高かった問題や低かった問題等について特に気づいた点を検証していきたい。

まず，最も正解率の高かった問題は42番であり，正解率は82.5％であった。

(42)　どこでそんなに素敵なコートを見つけたのですか。

Where（① a　② you　③ did　④ such　⑤ find　⑥ nice）coat ?

1．_⑥_⑤__　2．_①_④__　3．_②_④__　4．_③_⑤__

中学校で習う疑問文の基本的な形であるが，最低限の基礎力を問うために出題した。昨年度の正解率は76.7％であった。

2番目に正解率の高かった問題は1番と10番であり，正解率は81.2％であった。

(1)　A：Do you know what language is（　　）in Mexico ?

B：Yes. It's Spanish.

1．thrown　2．lent　3．spoken　4．told

この問題も短大で勉学を行うのに必要な最低限の基礎力が備わっているかを見るために出題し，80％を大幅に超える正解率を期待していた。この程度の問題でも，昨年の入学生の正解率は70％半ばであった。昨年の学生がいかに基礎力に欠けていたかがよく分かる。

(10)　A：I don't know（　　）Central Park is.

B：It's not far. I'll show you.

1．who　2．when　3．where　4．whose

昨年は76.7％の正解率であった。不正解者の多くが2を選んでいたのは昨年と同じ。次の2番の正解率はちょうど80％であった。

(2)　A：Excuse me. Can you tell me the way to the post office ?

B：Sure.（　　）straight down the street. It's on the right.

1．Break　2．Catch　3．Go　4．Put

正解率が80％を超えていたのは以上の4題であった。どの問題も昨年度の正解率を超えていた。

反対に，最も正解率の低かった問題は18番の

(18)　If it（　　）tomorrow, I'll probably stay home and read.

1．rainy　2．rains　3．raining　4．to rain

であり，正解率は16.2％と昨年よりも低かった。不正解者は1と3に大きく分かれた。be動詞がないのに主語itの後ろに直接形容詞をつなげたり，ing形を続けたりする基礎力不足が目立つのは毎年同じ傾向である。この問題は昨年度も最も正解率が低かった。

次に正解率の低かった問題は15番の

(15)　I just bought a new swimming suit. Now I'm ready（　　）summer.

1．for　2．along　3．at　4．on

であり，正解率は25％ちょうどであった。4人にひとりしかbe ready forを知らないのは意外であった。

英語基礎力を試すために出題した７番であったが，これも３割の正解率に留まった。

⑺　A：Here's your birthday cake, Jenny. You wanted a chocolate cake,（　　）you ?

B：Oh, yes, Mom. It looks delicious !

1．aren't　　2．didn't　　3．don't　　4．weren't

付加疑問文の基本的な形であるが，やはり基礎力不足が目立つ。

同じく，26番も３割の正解率しかなかった。

㉖　Be kind（　　）old people on the train.

1．at　　2．to　　3．of　　4．from

６割以上の学生が３の選択肢を選んでいた。毎年，同じところを同じように間違っている。

１番から35番までは基本的な文法・語法，36番から40番までは会話，41番から50番までは日常的な作文の力を見る出題をした。今年度の学生は，基本的なイディオムを知らないために得点できないケースが目立つのが気がかりである。文法・語法については基礎力にやや不安を感じたが，対話の問題や日常的な言い回しをやさしい英語で並べかえる問題は全体的に良い結果であった。このことは昨年とほとんど変わっていない。これも最近の学生のひとつの傾向になっている。

5．12月実施の英語力調査およびTOEICテストの結果について

これまで，4月に実施された英語力調査を基にして，今年度の学生の英語力を分析してきたが，12月の後期の最終授業時に前回と全く同じ条件で同じ試験を受験してもらい，どの程度スコアが伸びたかを調査した。第１回目（４月実施）と第２回目（12月実施）のテストの平均点と得点差をまとめたものが表５である。

表５　平成17年度英語力調査結果比較

第１回目	第２回目	得点差
約56.5点	約58.4点	プラス1.9点

12月実施の英語力調査では，経営情報実務学科53名，現代文化学科22名，全体で75名が受験した。欠席者はおらず，一年生全員が受験した。第２回目の短大全体の平均点は58.4点で，第１回目より1.9点上昇した。学科別に見ると，経営情報実務学科の平均点は58.3点でプラス1.4点，現代文化学科の平均点は58.9点でプラス3.4点という結果になった。現代文化学科の成績上昇が著しく，経営情報実務学科を逆転してしまった。得点を下げた学生もいたが，多くは現状維持か得点を上げていた。４月の段階では，29点以下のほとんど基礎力のない学生が６名いたが，12月には全員得点をアップさせていた。また，今回は久しぶりに90点以上の学生が３名おり，しっかり勉強し

た学生は着実に結果を残していた。

また，今年度も，Aクラスの学生に対しては，12月に本学で実施された第4回TOEIC IPテストを受験するように指導し，21名が受験した。他学部との比較は次の表6の通りである。なお，全学部の受験者数の中には，理学部4名，薬学部3名の受験者が含まれている。

表6　第4回TOEIC IP学部別平均点一覧

学　部	受験者数	スコア
短　大	21名	約287点
経　済	29名	約345点
経　営	550名	約250点
全学部	607名	約259点

全学で607名が受験し，平均点は259点であった。短大Aクラスの最高点は360点，平均点は287点であり，全学の平均点を上回った。昨年度の短大Aクラスの最高点は340点，平均点は246点であった。このことからも，今年度の学生の方がはるかに学力が高いことが分かる。

6. おわりに

最後にもう一度，全体の調査結果を振り返り，今後の英語教育の指導について考えてみたい。本学の特徴は基礎力のある学生とほとんど基礎力のない学生との中間の学生が非常に多いということである。これは従来から変わっていない。しかし，その中間の層は平成15年度から形を変え始め，どの層にもほぼ均等に学生が存在するという形から，中下位に比重のかかった台形的な形に移行し，昨年度はこの傾向がより強まった。最上位と最下位を除くあらゆる層にほぼ同数の学生が存在するのではなくて，中位よりやや下に多くの学生が集中していた。だが，今年度は幸いにも入学生の質が上がり，その悪しき傾向から何とか脱却することができた。今回はどの層にもほぼ均等に数が分布しており，学力低下の流れの中で，どうにか平成14年度のレベルまで戻したというのが率直な感想である。短大に入学して，しっかり勉学に励めば確実に学力がつくということが今回の2回の英語力調査でもはっきりしているので，一つでも上のレベルに到達できるよう何とか鍛え上げ，少しでも英語力をつけさせられるような指導をしていきたい。